

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	武田 宙也
論文題目	ミシェル・フーコーの美学 —— 生と芸術のあいだで		
（論文内容の要旨） 本論文は、二〇世紀フランスの哲学者ミシェル・フーコー（一九二六～八四年）の思想について、おもに美学の観点から研究を行ったものである。 フーコーは近年、人間の生とそれにまつわるさまざまな権力との関わりを問題とする、いわゆる「生政治」の議論で参照されることが多く、また今日では、この問題系をはじめて本格的に展開した哲学者としてよく知られている。 一方で彼はその晩年に、「みずからの生を一個の芸術作品にする」という理念から出発して、「生存の美学」という重要な概念を提出している。「生存の美学」が意味するのはまず、自己をひとつの作品として作り上げていくような生のあり方であり、自己への働きかけによる自己自身の変形へと向かう生である。この概念は、「生政治」概念といわば表裏一体のものと考えることができる。というのもそこには、「生政治」において主体に作用してくる力にいかに対応するかについて、フーコーなりの思索が込められており、その意味において、この概念は、「生政治」においていかなる主体の様態が可能かについての、フーコーによる構想として捉えることができるからである。 このように、「生存の美学」は、「生政治」と並んで後期フーコーにとって重要な概念であるのだが、それにもかかわらず、「生存の美学」は、「生政治」と比べるといまだ十分に論じられているとはいえない。しかしながら、先に述べた「生存の美学」と「生政治」の関係をふまえるならば、フーコーにおける美学というテーマは、たんに芸術の問題のみに終始するものではなく、人間の生までをふくむ、広く「社会的なもの」の賭け金となっていることがわかるだろう。本論文は、こうした点に注目し、この「生存の美学」というフーコー晩年のコンセプト、またそれにまつわる一種の主体論から出発して、彼の思想全体を捉えなおそうと試みたものである。 これまで、フーコーについて、芸術との関わりという観点から論じた先行研究においては、分析対象となるフーコーのテキストが、おもに前期の論考に偏る傾向があった。というのも、一般にフーコーが芸術について関心を持って向き合っていたのは、おもに前期の活動においてであり、その後は権力や主体というテーマに関心が移っていくのにつれて、それらのテーマからは次第に遠ざかっていくと考えられてきたからである。それに対して、本論文の特徴は、この晩年の「生存の美学」をめぐる主体論のなかに、彼の美学的なテーマの持続を見出し、そこからひるがえって、フーコーの思想全体を、生と芸術という観点から捉えなおす点にある。これは、フーコーの権力論の新たな解釈としてのみならず、「倫理的・政治的なもの」との結びつきをますます強めつつある現代の美学への貢献という観点からも大きな意義を持つと考えられ			

る。

本論文の内容は全三部（全七章）から構成される。まず第一部では、フーコーの六〇年代の著作を中心として、その前期の芸術論が「外」という概念とともにたどられる。このうち、第一章では、六〇年代の文学論および絵画論の検討から、「外」概念の輪郭を浮き彫りにし、第二章では、この「外」概念と同時期のより原理的な考察とのつながりを探究する。これにより、フーコーにおける「外」の形象の含意、その意味論的な広がりが明らかとなると同時に、この時期の芸術についての考察全体が「外の芸術論」として位置づけられる。

続いて第二部では、七〇年代以降の権力論の検討から、後期の主体論へのつながりが探られる。「生存の美学」に象徴される後期の主体論は、七〇年代以降の権力論、とりわけ生そのものへと働きかける権力への考察と表裏一体の関係にある。したがって、前者を理解するためには、後者の解明が不可欠となってくる。ここから第三章では、七〇年代の著作を中心にしてフーコーの権力理解を明らかにし、第四章では、この権力の抵抗点としての生の様態を検討する。

最後に第三部では、「生存の美学」を中心とした後期の主体論が、やはり「外」の観点から論じられる。このうち、第五章では、「生存の美学」の内実を明らかにし、さらに第六章では、この「生存の美学」を、ひとつの「外の美学」として位置づけた上で、最後に第七章では、こうして位置づけられた「外の美学」から出発して、同時期の芸術論をあらためて検討する。

以上の考察により、フーコーに特有の権力論を背景に、その前期の芸術論と後期の主体論を、「外」を蝶番として結びつけることができるだろう。こうして、フーコーの思想を、「外」という観点から、ひとつの美学として読み解くことも可能になるのである。

(論文審査の結果の要旨)

二〇世紀フランスの哲学者ミシェル・フーコー（一九二六～八四年）は、一九七〇年代以降、人間の生と権力との関係について、「生政治」の問題系を提唱し、展開した哲学者として知られており、事実、その問題系をめぐる議論で、しばしば引き合いに出されてきた。

また、一九六〇年代にフーコーは、絵画でいうと、ベラスケス、マネ、マグリット、文学でいうと、サド、ルーセル、バタイユ、ブランショ、クロソフスキーをめぐって、鮮やかな論述を残しました。

そのような事情もあってか、美学的側面からフーコーを論じる者は、六〇年代の著作に重きを置き、社会学ないしは政治学の側面からフーコーを論じる者は、七〇年代以降の著作に重きを置く傾向があった。その結果、フーコーの思想がまとまったかたちで理解されにくいことになっていたようにも思われる。

さらに、フーコーは晩年、自己をひとつの芸術作品として作り上げていく生のあり方を「生存の美学」として概念化したため、六〇年代の芸術論および文学論とのつながりが、よけいに見えにくいものともなったのである。

本論文は、フーコーの思想を、おもに美学の観点から研究しようとするものであるが、何よりも課題とされるのは、前期の芸術論および文学論と、後期の「生存の美学」とのあいだに、どのような一貫性を見いだすかである。そのための手がかりとされるのが、「外」の概念である。

前期の芸術論および文学論で、「外」といわれるとき、それは主体の外部としての外が念頭に置かれていたといつてよい。ところが、中期の権力論を経由するなかで、「外」の扱いが、微妙に変質してくる。それは、いかなるものも権力の編み目に絡めとられている以上、権力の絶対的な外部など語りえないからである。そのあたりの事情を、本論文は、たとえばサドの扱いの変化から、鋭く読みとっている。

前期のフーコーの立場が「外の芸術論」として特徴づけられるとすれば、後期の「生存の美学」の立場は「外の美学」として特徴づけられる。ただ、後期でいわれる「外」とは、折り込まれた外部としての「外」、いわば相対的な「外」である。絶対的な「外」は、もはや語りえないのである。さらにいえば、「外の芸術論」で問題となった「外」とは、主体の外部であったのに対して、「外の美学」で問題となる「外」とは、主体を別様に変形させようとする外部である。なぜなら、近代に「生政治」が進行するなかで、自己への働きかけによる自己自身の変形へと向かう生が問題とされ、そのような生こそが「生存の美学」の賭け金となるからである。

このように本論文は、「外」の扱いの変質を追うことで、フーコーの美学的な関心の継続と変容を描きだす。そうすることで、フーコーの思想全体を、生と芸術という観点から捉えなおすことにもなっている。これは、フーコーの権力論の新たな解釈としてのみならず、「倫理的・政治的なもの」との結びつきをますます強めつつある現

代の美学への貢献という観点からも大きな意義を持つと考えられる。

審査の過程で、外部というからには、外部と内部との関係にさらなる具体性が望まれるという意見が出された。また、自己を変えようとしたはずのフーコーに一貫性を見いだそうとすることに、どのような意味があるのかという問いかけもあった。とりわけ後期のフーコーは、プラトンをはじめとする古代哲学の読み直しを行なったが、近年の哲学史の叙述からすると、あまりにも基本的な問題が素通りされているのではないかという、疑問が呈されもした。

しかし、フーコーの膨大なテキスト群を、前期から後期まで読みぬき、「外」の概念の変容という独自の観点から、フーコーの美学をまとめたかたちで提示しえたことは、斬新な成果として評価される。

よって本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値のあるものと認める。また、平成 25 年 1 月 18 日、論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降